



2012年8月15日放送

印象に残る症例②

横浜元町女性医療クリニックLUNAグループ 理事長 関口 由紀

私が漢方の勉強をはじめたのは、長男が1歳の時です。1歳になったばかりのまだ赤ちゃんなのに、長男は喘息様気管支炎になってしまったのです。その時たまたま漢方の講演を聞く機会があり、長男の体質は、漢方で改善できるのではないかと考えました。そして私の漢方道がはじまりました。その道に長男が付き合いされたのはいうまでもありません。

その後長男は、何度か喘息で入院したりしましたが、漢方薬のおかげで、ここ10年くらいは喘息を起こさず過ごしています。ただ悪いくせが残ってしまいました。もういい大人なのに、風邪などで漢方薬を飲む時は、私に飲ませてくれと、アーンと大きな口を開けるのです。6年後次男が生まれましたが、このころ私は、一般泌尿器科医から、女性泌尿器科専門医に転向しました。つまり女性泌尿器科の詳しい勉強の前に、私は、幸運にも漢方の勉強をしていたのです。

まだ一般泌尿器科医であったころ、大塚敬節先生が、提唱した疝気症候群という病態があることを勉強しました。これは手足が常に冷たく、慢性の下腹部痛を訴えるが、疾病の本態は現代医学的検索によっては不明な病態で、特徴としては肝経の変動症状、ことに泌尿生殖器の障害、開腹手術、ことに婦人科手術、妊娠中絶、帝王切開の既往が多いという症候群でした。このような症候群の患者には、当帰四逆加呉茱萸生姜湯が有効だとされていたのです。そのころの私は、知識としてこの疝気症候群を理解しました。

現在私は、女性泌尿器科専門外来で、1日50名くらいの患者を診察しているのですが私の外来には疝気症候群と診断できる女性が、毎日10人から20名くらいやってきます。現代医学ではこのような人たちを膀胱痛症候群とか、慢性骨盤痛症候群と呼んでいます。

この原因ははっきりしないけれど、へそから下のどこかが痛い病気は、慢性疼痛症の一種です。慢性疼痛症は、体のどの部分でも起こる可能性があります。ひどくなると全身に痛みが広がって線維筋痛症という難病になってしまうことも稀にはあります。慢性疼痛症の治療は、西洋医学的には、末梢神経障害性疼痛治療薬で痛みの出所を治療し、抗うつ剤で痛みを受けとる側を治療します。この治療で痛みは、かなり改善します。しかし合併す

る冷えや、だるさ、眠気などの自律神経失調症状は、西洋医学ではなかなか治療できません。その時に効果を発揮するのが漢方薬です。

Bさんは、慢性骨盤痛症候群の治療に、西洋医学的な治療と漢方治療の併用が効果的であるということ、私に実感させてくれた患者さんです。当時彼女は、33歳の、バリバリのキャリアウーマンでした。彼女は、1年前に子宮筋腫の腹腔鏡による核出術を受けました。手術は成功しましたが、出血が多かったため安静のために尿道カテーテルを3日間留置されました。3日後に尿道カテーテルを抜いてもらい、自力歩行可になりました。やっとすっきりしたと喜んでいるのもつかのま、1時間くらいすると膀胱のあたりに不快を感じ、尿をしたくなりました。トイレにいったら排尿すると、ちょっとの間は、スッキリするのですが、また1時間もするとトイレに行きたくなります。尿道カテーテルを抜いた日は、排尿回数は15回でした。医師に頻尿のことを訴えると、尿道カテーテルの刺激による一時的な膀胱炎だから、数日すると良くなると説明をされました。しかし1週間後の退院日になっても頻尿と膀胱のあたりの不快感は改善しません。しかし尿検査の結果は正常だったので、頻尿と膀胱のあたりの不快感は気のせいだとかたづけられて退院になってしまいました。

その後何件もの泌尿器科や婦人科を受診しました。抗菌剤、抗真菌剤、抗ウイルス剤などを投与されましたが、彼女の頻尿と下腹部痛は、すこしずつ悪化していきました。私の外来を受診したのは、手術後6か月。排尿回数は、起きている間に20回、寝ている間は5回という状態でした。常に恥骨の付近と尿道口の付近に不快を感じると訴えます。疲れ切っているように見えて、それでいてイライラしているようにも見える肝経の変動状態でした。

以前は、末梢神経障害性疼痛の治療薬はまだなかったので、私は、少量の抗うつ剤投与から治療を開始しました。抗うつ剤10mg夕食後1回は、なんとか服用できました。可能ならばゆっくり増量して50mgくらいまで増量したいのですが、Bさんは、20mgまでしか内服できません。30mgに増やすと、めまい・口渇・眠気・便秘のオンパレードになってしまうのです。しかたなく抗うつ剤20mgを3か月くらい継続しました。結局起きている間の排尿回数は15回、寝ている間は2回、尿が貯まっていない時は不快を感じないが、尿が貯まってくると恥骨の付近と尿道口の付近に不快を感じるというレベルまでしか症状が改善しません。

困った私は、彼女の今一番困っている症状は何か質問しました。するとその時の彼女がもっとも困っている症状は、なんと手足の冷えだったのです。この時、私はピンとききました。彼女は手足が冷えており、婦人科手術後に下腹部痛に悩まされている。さらにその原因は、不明であると多くの医者で言われているのです。寝かせて鼠蹊部に触ると、とても痛がりました。さらにかかなり疲れはてており舌の白苔はすこし厚くなっていました。私は、三環系抗うつ剤をこれ以上増量するのを中止し、漢方療法併用に切り替えました。選んだ方剤は、もちろんツムラ当帰四逆加呉茱萸生姜湯7.5gです。さらに現在の彼女では、すこし胃腸に負担がかかりすぎると判断し、ツムラ四君子湯7.5gを合方しました。

4週間後彼女の手足の冷えは8割改善、起きている間の排尿回数は8回、寝ている間は1回、尿が貯まっても恥骨のあたりの痛みはほとんど気にならなくなっていたのです。尿道付近の痛みはまだ残っているようですが、この劇的な変化に彼女も驚いていました。さらにこの処方薬を3か月間継続しました。さらに骨盤底筋の緊張があったので、骨盤底筋トレーニングと骨盤底筋マッサージも併用しました。これにより最後まで残っていた尿道付近の違和感も改善しました。

もともと月経痛があっても、体に悪いからと、痛み止めを使用せず、痛みを耐えながら、残業して忙しい仕事をこなしてしまうタイプだったとのこと。私は、痛みは、無理をしているという体からあなたへの警告であること。警告がでたら、なるべく速やかに痛み止めを飲み、仕事をさっさと切り上げて、安静やリラクセスに心がけるようにと“養生”をしつこく説きました。体調が悪い時は、適当に仕事をさぼることができるようになることが、働く女性には必要なのです。

その後まず抗うつ剤は中止とし、漢方は、6か月くらいかけて減量していきました。最後のほうは、漢方薬も飲んだり飲まなかったりになり、時々顔を見せるだけになりました。

うれしかったのは、4年後に妊娠したと言って、彼女がひょっこりクリニックを訪れくれたことです。あの病気以来彼女は漢方をとても信用するようになったとのこと。39歳で高齢妊娠をした時に、すぐ漢方薬を飲もうと思ったそうです。診察すると、ストレスと食べすぎのためか、4年前と同じように舌の白苔は少し厚くなっていました。ツムラ当帰芍薬散7.5gとツムラ四君子湯7.5gを開始しました。さらに食欲にまかせて甘い物や冷たい物の多食をしないように説明しました。さらに4年前と同様に、疲れた時は仕事を、人にばれないように適当にさぼるように指導しました。彼女の節制は、功を奏し、無事に健康な男の子を経腔分娩で授かることができました。

現在は、2年に1回くらいおこる急性細菌性膀胱炎の時にやってきます。彼女は、抗菌剤だけではすっきり治らないのです。自分で、“猪苓湯と四君子湯を1か月分くらいください。”と注文して、漢方薬をもっていきます。そのたびに私は、疲れたら仕事を少しさぼるように彼女に語りかけています。